

しゅんどおる

ACEF 43rd Study tour in Bangladesh
2012.8.3-8.15



目次

* 参加者名簿	2ページ
* 日程	3ページ
* ACEF と BDP について	4ページ
* バングラデシュってどんな国？	5ページ
* メンバー紹介 A チーム	6, 7 ページ
B チーム	8, 9ページ
* 活動報告 ボリシャル(A チーム)	10, 11 ページ
ジャマルプール(B チーム)	12, 13 ページ
プーバイル	14, 15 ページ
* ばんぐらの楽器	16, 17 ページ
* ベンガルnon-no	18, 19 ページ
* モジャ!ばんぐらめし	20, 21 ページ
* 写真ページ ボリシャル	22, 23 ページ
ジャマルプール	24, 25 ページ
プーバイル	26ページ
秘蔵スナップ	27 ページ
* Bengal Fashion	28, 29 ページ
* BDP スクールの子どもたち	30, 31 ページ
* 感想文	32-48 ページ
* 編集後記	48ページ



第43回ACEFスタディツアー参加者名簿				
	性	氏名	ローマ字	備考
<u>Aチーム(カティラ地区)</u>				
1	M	寺島 昭二	TERASHIMA Akitsugu	富士見高原教会牧師
2	F	井上 儀子	INOUE Noriko	ACEF事務局
3	F	川上 純佳	KAWAKAMI Ayaka	青山女子短大2年 英語学専攻
4	F	岸 ひかり	KISHI Hikari	青山女子短大1年 国際専攻
5	F	榎森 遥	EMORI Haruka	東洋英和女学院高校2年
6	F	須藤 環	SUDO Tamaki	東洋英和女学院高校1年
7	M	杉山 貴浩	SUGIYAMA Takahiro	横須賀学院高校1年
8	F	久松 幸	HISAMATSU Sachi	横須賀学院高校1年
<u>Bチーム(ジャマルプール地区)</u>				
1	M	天野 海走	AMANO Kaiso	横須賀学院高校 宗教主任
2	F	前田 恭子	MAEDA Kyoko	ACEF事務局長
3	F	村 早苗	MURA Sanae	立教大学2年 心理学科
4	F	大内 麻代	OUCHI Mayo	東洋英和女学院高校1年
5	F	林 由季乃	HAYASHI Yukino	横須賀学院高校2年
6	F	柴崎 里彩	SHIBAZAKI Risa	横須賀学院高校1年
7	F	寺澤 小枝子	TERASAWA Saeko	共愛学園高校2年
8	F	樋口 茜音	HIGUCHI Akane	共愛学園高校1年
				

43rd スタディーツアー日程表

date	time	activities	
8月2日	pm	羽田空港発	
8月3日	am	タイ空港着・タイ空港発	
	pm	ダッカ空港着・ブーバイルオフィス着	
8月4日	am	職業訓練校訪問	
	pm	市場にて買い物	
8月5日	am	教会にて礼拝参加	
	pm	市場にて買い物・オムロさん宅訪問	
チーム別行動開始		Aチーム	Bチーム
8月6日	am	移動	移動
	pm	カティラオフィス着	ジャマルブールオフィス着 ホビさん宅訪問
8月7日	am	BDPスクール訪問	BDPスクール訪問
	pm	お休みタイム	BDPスクール訪問
8月8日	am	BDPスクール訪問	BDPスクール訪問 岸辺の村訪問
	pm	ヒンドゥー・キリスト教の村訪問	市場にて買い物
8月9日	am	フリータイム	BDPスクール訪問
	pm	ボートクルーズ	BDPスクール訪問 市場にて買い物
8月10日	am	BDPスクール訪問	BDPスクール見学 ボクシガンジオフィス着
	pm	フリータイム	カロ族の村訪問 インド国境付近の村訪問
8月11日	am	BDPスクール訪問	BDPスクール訪問
	pm	フリータイム 現地の女子大生と音楽交流	ジャマルブールオフィスにて サリー着付け・メンディー体験
8月12日	am	移動	
	pm	ブーバイルオフィス着	
8月13日	am	BDPスクール訪問(2校)	
	pm	アーロンデパートにて買い物	
8月14日	am	BDPスクールにてカルチャーショー	
	pm	ラップアップミーティング	
8月15日	am	ブーバイルオフィス発・ダッカ空港発	
	pm	タイ空港着・タイ空港発	
8月16日	am	成田空港着	

アジアキリスト教教育基金(ACEF)

とは...

日本の学校、幼稚園、教会、団体、有志など協力により、バングラデシュにあるNGOのBDPと共に、バングラデシュ国内に寺子屋(小規模学校、初等教育)を贈る運動を行っているNPO法人である。1990年に設立、2004年に特定非営利活動法人(NPO)として認められた。また、教育支援だけでなく、アジア諸問題に取り組む青年の育成も目指しており、年2回のスタディーツアーや、ACEFセミナーを実施している。

Basic development partners(BDP)

とは...

バングラデシュで学校に行けず、街で物売りをしている子ども達が働きながらも通える寺子屋学校を開き、一人でも多くの子ども達に教育の機会を与えることを目的としたキリスト教系NGO団体である。1990年にDr. ミナ・マカル女史によりSEPC(Sunflower Education Program)として寺子屋運動が始まる。その後、運動はプーバティル・カティラ・ジマール・ポール・ボクシガニジ・ネロトナ地区へと広がっていき、1999年に政府から正式にNGOとして認可を受け、BDPへと改名。現在82校の小学校と2校の職業訓練校がある。

バングラデシュ

ってどんな国?

正式名称: バングラデシュ人民共和国

首都: ダッカ

人口: 1億4千万人

面積: 14万4千km²(約九州2コ分)

言語: ベンガル語

宗教: イスラム教徒が90%

その他には
ヒンズー教
キリスト教
仏教など。



Please
come to
Bangladesh!



A team go to kathira

デイコさん

オシロいなBDP staff
新婚さん♡
皆1人1人のことを
よく見てくれる。

のりピー

とってもキュートな
ACEF staff.
皆を癒しつつ、たまたまに
多い量のご褒美を。

いじや

シャボール並みの白い
シザガトレードマーク。
大にササ分れる
牧野先生。

さち

Aチームの盛り上げ役!
でも実はシャイな面も♡
カティアでは高熱を出した。

ニキルさん

皆大好きニキルさんは
Aチームのドライバー☆
素敵な笑顔には
全員ぞん笑

まし

うらささはチーム1かな
大学生。重労働大好きで、
見るとつい叫びたす。

ジュムール

皆のことが大好きで、毎日遊び
にくる男の子と思いきや実は女の子。

ホロコ(仮名)

誰か一件何物なんだ...?
東洋風に見えなくもなすけ?

はるか

いかりな！だぞかし、
「ヤルコア」に「行ってきて」
装束をしてもいいの？



たまき

Sweet ballerina♡
ツボにはまったお母さん
運命はくる。

あせはるん

一月前、お母さん大生♡
しかし中身は...？
カメラを向けるとお母さん
してくれたい。

木りちゃん

黒一点！でもすぐおじ
さんでした。空手が得意。
サングラスをかけるとお母さん

ピカパルさん

カネウラのスタッフさん。
「モット」になってジーンズを
下着に型くするが情熱を

ダニエルさん

カネウラのバズ！
いたずら大好き！
ポストではオールスター
がけてきたwww

ジョンさん

カネウラのスタッフさん。
かわいいお母さんと
ステキなお父さんを持つ♡

モンクシさん

カネウラでは私達の身が回り
のお世話をして下さいませ
こっそりとお母さんをおじい
下着に型くするが情熱を♡



あかち

短髪アキラちゃん
田んぼにおちる♡



モタレツ
さん

やさい♡まじゅ♡
おはきマニ♡

ケリン
伝説のケリンTシャツ
ミンガーのマジシャン



きんきん

みゆの♡の母
虫ゼラテ、カワテ♡



さとし

大好き!大好き!!♡
ベングラの
お兄ちゃん♡

Jamalpur

むら ぶん



さそ

あちせうた♡
さしうた♡
マニマニ♡
さしうた♡



ヘモト

別名ミカバニ
涙もいる



まよ

ミカバニの大天使
日本舞踊のスーパー
ガール♡



Coooo!!!!な
我が軍手



マクレス
さん



ステファ
さん

変顔性
スラムユ大好き♡

いづきの

Peace ♪



クーパー家
モジャカレー♡♡家族
ミュードル
フジト♡

夢の頼るリーダー!!
お腹だん寝て♡



♡♡

マッチョ
マッ

4キ4キ!!
お茶目♡
うん



メロメロ♡

ピンクPちゃん!
ホビエ〜♡(?)
♪



リサ

♡♡♡♡

THE.一眼レフ
お揃いさよはあほせん



キラッ

かいぞ〜



ホビ
さん

りササアツン!!!
りササアツン!!!
りササアツン!!!
りササアツン!!!
りササアツン!!!

BARISAL

From
Team A

☀️ 学校訪問

BDP小学校4校を訪問しました。
どの学校も個性豊かで輝いた子供達でいっぱい！
"教師の原点"とも言われた先生に圧倒され、
頼もしい女の先生の姿に目を奪われ、
そして、夢を語る子供たちの瞳に未来を見ました！！

整列して
お出迎え！！
→



完璧な全校体操→

← 低学年クラスも
皆集中してます！



家庭訪問

BDP施設の近所にある村に行きました。
ヒンドゥー教の村とクリス教の村が、
お互いの宗教を理解して共存している形が
とても印象的でした。
自然豊かな場所でチャチャはたくさん子供達を
みて、バンクラデシュの人の心の豊かさの理由が
少し分かったような気がしました。

男は勝負好きな子
まるでジャンダルワ！



← カティアキッズたち

← カティアキッズのボス、
その名も Marlboro (仮)
男は背中で語り出す♡

クリス教の村に住む cute な姉妹→



ハフニング①

そして突然浮きあがった謎の白髪！
その正体は爺やこと寺島先生でした。
さすがすぎる行動にSTメンバーは困惑...
ちょっとした事件でした。

※実は... デイコエムから
入るなど言われていました(笑)
入った場合は、
「デイコエムとアールビルまでの
7時間Date♡も強制送還)」のハズ。



※近所ではゾウに
戸惑いをかくせが...
ニキルエム(ゾウ)
ニコニコ(ゾウ)
(それ以外のゾウはゾウ)



ハフニング②

初日から馬鹿々々しくTeam A
なんとも人同時にダウンする日が
そこから順番にカセがわかって
いま、バカロン先生大活躍中
それでももうエスデに我らがA
劇も完成しないという事態に...
のりー、爺や、迷惑かけてゾウさん♡



※ BDP カテラススタッフ三人衆
(左から) ビックルエム
ダニエルエム
ジョンエム

水辺がキレイな地
カテラスのすばは！



※ 学校以外、
毎日のように
遊びにきてくれた
カテラスキッズ。
左のグループは、
BDP小学校の
1年生です。



この橋を渡った先に家がある！！
少年は日に日に逞しく強くなります。
手を使わずに
渡れるころ、
彼はきっと
小学生☆



そして、涙のthe last night !!
カテラスのBeautiful girlsから歌のプレゼント
日本とバングラデシュ
交互に歌ったり、
踊ったりして、
とても盛り上げました。
ここでデイコエムが
本領発揮 !!
ドヤルババの迫力たるや...!

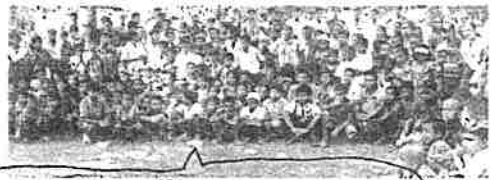


送

～ 学校訪問編 ～

とってもステキなダンス!!

初芝21小学校のサマ



たくさんの方が集まってきました!

かわいい♡

△ 絵は巻は魔除けのために
おでこの上あたりに黒い
丸をかいていて!



あかりが無いから
天気が悪いと暗い



モリスさん(ゴ) (鬼)

教科書抱きめ!



この年が舟を運転してくれた!



Mr. ボクシ Baby

学校の生徒の住む、カボタ村
島に到着しました!!

カボタ村の学校

Welcome welcome-S!!



↑
矢張の家に
おじやましました

私たちの自己紹介
中にえんぴつが
いれた箱が
17才!!



わはい!! ばかり言っていたら
みんなが笑えなかった(泣)

じいちゃん
おじやましました(笑)

インドの
国境



島の地面は曲線ばかりに
柔らかくてとんとん歩きたい
と、子どもたちが叫びかけてくれました♡



◆◆プーバイルにつき◆◆

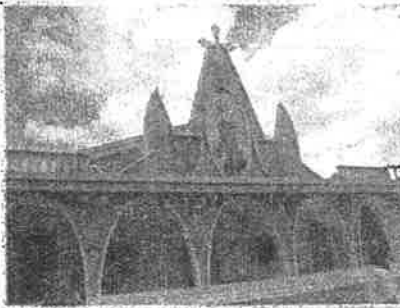


8月3日

空港から出て、まずはっきりなしに聞こえてくるクラクションにただただビックリ
心配していた紙の無いトイレ、手でいただくお食事もやってみれば簡単なことだった
初めて食べるベンガルカレーは想像以上においしくて、全カレーを制覇するために、2週間絶対に体調を崩さないぞ！！と密かに決意した夜だった

8月4日

職業訓練校にお邪魔させていただいた
コンピュータのクラスでは女の子達も多く、私と同じくらいの年齢の子が、家庭を持ちながらも手に職をつけようと熱心にコンピュータを分解している姿が印象的だった
午後にはサロワカミューズを買いに行き、その涼しさに感動を覚える。。



8月5日

キリスト教の村の教会にて礼拝に参加させていただいた
だんだんと下手な英語と全然喋れないベンガル語でコミュニケーションとるのが楽しくなってきた！恥ずかしがらないで笑顔でいれば言葉の壁なんてどうにでもなるのかも
大抵のことは、オシュビダナイ（問題無い）！

8月6日

今日からAチーム、Bチームとそれぞれカティアとジャマルプールの農村へ移動、しばしの別れ～
ジャマルプールに着くとプーバイルと比べ貧しさを感じることも多く、バングラデシュ内での貧富の差について考えさせられた





8月12日

1週間の農村生活もあっという間に終わってしまい、涙の別れ後プーバイルへと帰ってきた

帰り道で見かけた脅威の4人乗りバイク、、、警官すらもノーヘル二人乗りだったし、運転中のトラックの荷台で寝ている人もいたし、すごい。。。としか言えない(^P^)

8月13日

今日は雨の中ダッカのスラムのBDPスクールを見学させていただいた

狭いビルの一室や墓地の一角に建てられたトタンの学校でぎゅうぎゅうに座って勉強する子ども達の目の輝きは、陳腐な表現だとは思うけどキラキラしていて何度見ても涙が出そうになるものだ、、、



8月14日

プーバイル事務所の近くのBDPスクールでバングラデシュと日本の文化交流を行い最後の学校訪問を楽しんだ！

特にまよちゃんの日本舞踊は棒立ちで見入ってしまう子もいた程だった(´▽`*)

明日帰国してしまうのが本当に寂しい、、、しみじみと2週間を振り返る夜となった

8月15日

野菜カレー、ルティー、ゆで卵、バナナ、チャー、、、プーバイルで毎日おいしくいただいていた定番の朝食メニューとも今日でお別れと思うと切なかった

余談だが、私の全力レー制覇の夢はこの日を持って叶えられたのであった！＼(^O^)/
またバングラデシュに行きたいな



ばんぐらの楽器

ベンガル人はとってもリズムを取るのが上手！（なように感じました。）

そして、歌が大好き♡（だと思います。）

ほとんどの小学校で、歌をきかせてくれました。

歌は長い！5番くらいまであるのがベンガルスタンダード!!♪

そのときによく使われるのが…



タブラ（太鼓）と

ハルモニア（置いて使うアコーディオンのようなもの）



太鼓はこんなに大きい！

これを抱えて使います。



ダンスが上手な子が多くて、圧倒されました。



帰ってきてからもベンガルソング達が頭から離れません♪

ペンがし Summer

non-no

最新
ファッション



サロワカ
ミューズ
2012 ver

決める
ないよ



カラフルな
ドレスが
いいよ!!

レギ
船乗り
の
インも
着る



キリ

cute!



サリ-エイミシビエ-ス



おしゃべりな子ちゃん

はだおー!



子どもたちは上半身裸の子も多かった

BDPの先生方の
サリ-姿!
美しいです

この色が
うっけの
いつ!!



Beautiful

耳かざり、腕輪
もおしゃれ!

手と
いいよ



ピアスも
ハデな
多い

合うはずで
困っちゃう?



サロワが
あずい~!



フォーマルダ



BOPスクールは、ハダシの子どもが
多かった。。。

ガロ族の伝統的衣装
ドクマニダ



巻玉スカート
みたいて
← カワテ!



スラムの子どもたち



毎日
サロワが
ずいゝいた!
超倍速♡



もじゃ！ばんぐらメッ



朝ごはん

Breakfast



昼・夜ごはん

Lunch & Dinner

これが基本スタイル！



朝はナンのようなクレープのようなパン「ルティ」を食べます。このようにカレーやバナナをくるんで食べました。激ウマです！



バングラでわ、
カレー
カレー
カレー

の毎日でしたが、全く飽きません！

それくらいウマいです！

ベンガルカレー最高です！



自分たちのためにアレンジしてくれた料理も作ってくれました。スタッフの皆さんの優しさに感謝です！

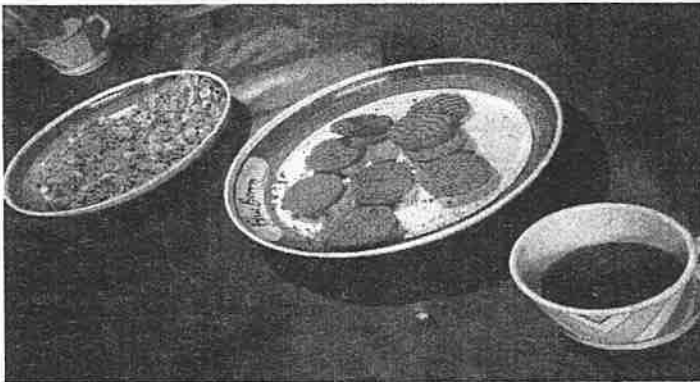
もちろんバン格拉デシュでは右手をつかってごはんをたべました。はじめは戸惑ったけど、すぐ慣れました！けど、これが地味に難しい。

おやつにお菓子をたくさん食べました。
意外にどれもおいしくてびっくりしました！
特にクッキーとベビースターみたいなお菓子が自分は好きでした♪(下の写真)

ポテチ系の湿気るスピードの速さにびっくりもしました。だいたい開けてから5分くらい(笑)

ジュースもおいしかったけど、かなり甘いです。

日本でもおなじみのジュースの味も若干違う感じがしました。気のせいかもしれないけど…。



バングラデシュは紅茶が有名。

食後やおやつ時には毎回でできます。

ほんとにおいしくてたまりませんでした！そして、これもまた激甘です！

異常な程の甘党の自分にはたまりませんでした、普通の舌をもつみんなははじめは驚いていました。

けど、これがおいしいんです。紅茶にどれだけ癒しをもらったことか。これがベンガルティーなんです！最高でした♪



この写真は近所に落ちてきたスターフルーツです。特においしさを感じられるものではなかったですけど、初めて食べたので感動しました。(どーでもいい)暑い国ではやはり塩をつけるんですね！環境に適した食べ方ってものを実感してきました。



町のいたる所で野菜やスパイスなどが売られています。近くを通るだけで辛かったです。(笑)



自分たちは普段当たり前のようにごはんを食べています。お店には加工された食材やもうすでに完成してる料理が当たり前で売られています。けど、その段階になるまでには多くの人達の手をたどってきているということを改めて実感しました。そしてなによりも、自分たちは多くの命をいただいて生きているということをすごく実感しました。豚の解体を見た時、今朝までいた鳥が夕飯になって出てきた時に感じた気持は一生忘れません。ほんとにすべてのことに感謝の気持ちが生まれました。

これからはよりいっそう自分たちがごはんを食べられること、そしてその食材の命に感謝していきたいです。好き嫌いなく残さず食べます！



たくさんのおいしいごはん
とその命にドンノバット！
ごちそうさまでした！





A子一△a.k.a.KTR48

The best frienz ♪



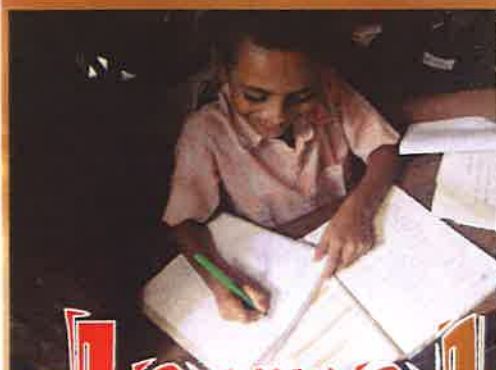
～らいふ いん かていら～

8/6～12



Team B





Jamalpur







Bengal Fashion

Women's Style



* サロワカミューズ *

未婚の女性が着るもの。

サロワ(ズボン)、カミューズ(ワンピース)、オロナ(スカーフ)の三点セット。オロナがないとスカート履いてないのと一緒に！(のりぴ一談)

写真のようにズボンが細身のものが今の流行！

オロナの巻き方にはいろいろなパターンがある。



* サリー *

結婚した女性の着るもの。

長さ6メートル！もの布を巻きつける



Men's Style



* ルンギ *

布を巻いてスカートみたいにする。
便宜上短くすることもww



ルンギに
上裸(笑)で
おはやり
ジグザグす



* パンジャビ *

ワンピース。
少しフォーマルなスタイル。

BOP Schoolの子どもたち

分数の授業 教室も朝・昼・夕・夜ローテーション

タカ

タカのビルの狭い教室にて

嵐がババが無くなってしまった

タカの学校の照明が暗い

ラマダンのため、1ヶ月間中は通常授業が休校でした。にも関わらず、こんな沢山の子どもたちが！

皆がよし！

鉛筆はとて大切に扱われています

大きな窓で光が入り！

養育クラスにて日本の「バザー」などで購入できます！

僕たちボンドム！（友だち）

キレ！

Welcome!

みんなが出入りできるようにしました

教室の席に貼りました

スラムの学校は、基礎を抜いた先

私が養育クラスの子

初めて見る日本人、ちょっと緊張した？

ごめんね

教育の大切さを親衛士に知ってもらうため、養育クラスの子はとて大切だよ

コンピュータクラスの
女の子たち!



自動車
電気
クラスも
あはれ

教科書は湿気じぼるぼるに...

大切に保管しています

BDP
スクールは
教科書代も
全て無料です



2kmは離れた
学校から
わざわざ
来てくれました!

入りおなつて、床に座って
授業を受ける子たち



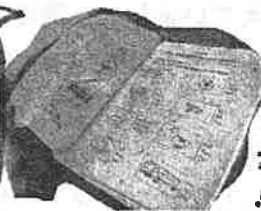
毎
年
クラス

多い!

シヨール



川が泳いで
登校してる子は
先生の家に
教科書も
あおけています



読者です!!

地域の協力と理解を得ながら
何事もがけて。
書庫教室 → トタン → レンガ造りの学校
へ造り換えます。

トタン
造り
↓



雨が降ると足元が
ぬかるかます...



スラムの学校
の
目の前



校長先生が学校用の土地を寄付
してくださったそうです!

教室にがらってあった
日本の国旗!

バンダと日本の国旗は
おてんぱいします



先生はめん
めんです
😊



先生は生徒みんな
とコミュニケーションを
とっていました

仲良
勉強中

Green!
Red!!
Yellow!!!



ツアーリーダーという大役を仰せつかって43回スタディツアーに参加しました。仰せつかってからもツアーが始まってからも脳裏を離れなかったことがあります。「ツアーリーダーとは何か」というということです。今回は事務局から前田事務局長、井上儀子さんが参加してくださいましたから、ツアーリーダーというのは何か不測の事態が生じた時に責任を負うこと、と自己理解しておりました。何事もなく二週間のスタディツアーが終了しましたから、そういう意味では自己理解していた責任は果たせたかなあと安堵しております。前田さん、井上さんに負うところ少なくありませんでしたからお二人には深く感謝しています。現地では、といってもプーバイルでの数日、ジャマルプール、カティラでの一週間、スケジュールはすでに決まっていたのですから、ツアーリーダーの責任はタイムキーパーでした。これでよかったのかなあという反省は今も頭を離れません。今回のスタディツアーの参加者は高校生九名、大学生三名、そしてサブリーダー一名、そして事務局からのお二人。ラマダンの期間ということで、少し遠慮気味に！という現地スタッフの声はメンバーに伝えましたが、若者のテンションの高さは私たち大人の思いを遥かに越えていました。孫のようなとはいませんが、孫に近いような世代の気持のテンションにはとてもついて行くことが出来ず、私はみんなから「爺や」の称号を与えられてただ「はめ」を外さないように、ということだけに心配りをしました。実際には「はめはずれ」もあったりして事務局の方々、天野海走さんにはご迷惑、ご心配をかけました。軽々にツアーリーダーのお役をお引き受けしたことの反省仕切りです。スタディツアー参加は五回目でしたが、実は過去四回はいずれも春のツアーでしたから、夏のツアーは初めてでした。夏のバングラデシュを知らずしてバングラデシュを語るな！と何度もいわれ、それでは、と今回に参加に至った次第でした。

ジャマルプールでの責任は天野さん、前田さんに委ね、私は井上さんとカティラを訪ねましたが、熱を出して休んだメンバー、風邪というよりはむしろ騒ぎすぎ、興奮しすぎにより体調を壊したメンバー、井上さんの転倒による頭部打撲、心配されましたがスケジュールは滞りなく消化出来たと思います。お腹をこわすことを心配しましたが、むしろ体調不良はむしろ「風邪」でした。これは夜通しファンを点けておかなければ眠れない暑さによるものです。夏の旅では思いつかない薬や湿布薬を持参して行った高校生に助けられたこともありました。ツアーリーダーとしてよりもメンバーとして今回のスタディツアーを十二分に楽しませていただきました。BDPスタッフのみなさんには一方ならずお世話になりました。アルバートさんが病気のために入院、手術という思いがけない事態の中でスタディツアーを心配してくださっていました。その後のことがわかりませんが、お元気になってくださるようにと願っています。

「あなたの子どもを学校に送りなさい」

ACEF 井上儀子

「あなたの子どもを学校に送りなさい」私たちの車の前を走るトラックの後ろにこんなスローガンが大きく掲示されていました。国の教育に関する車なのか NGO の車なのかと思ったら、民間のセメント会社のトラックです。教育の大切さが町の中に村の中に浸透してきたのでしょう。その反面まだまだ学校に行っていない子どもたちがいるということです。

ACEF と BDP が寺子屋運動を始めたのは 21 年前、その頃貧しい家庭の子どもたちを学校に送り出すようにと両親を説得するのは大変困難な状況であったと聞いています。BDP のスタッフは一軒一軒家を訪ね、子どもたちへの教育の大切さを何度も通いつつ説得に努めたそうです。今現在、バングラデシュ国の統計では就学率 97% と言っていますが現実には 7%~20% の子どもが学校に行っていないそうです。さらに義務教育の小学校 5 年間を終えるときには半分の人数になってしまうということです。

カティラ村では毎日子どもたちが私たちの宿舎の前に集まってきます。もう学校に通うのは当たり前と思っていたのですが、「何年生？」という問いに口をつぐんでしまう子どももいました。どうも学校が好きじゃないような子どももいましたが、学校をやめてしまった子どももいるようです。もちろん働きながら BDP の学校に通う子どももいます。貧しい家庭では子どもも立派な働き手です。そのために BDP では午前と午後のシフト授業にして働きながらも学校に通えるようにしています。先生方は子どもたちの家庭環境をよく把握していて、小さな弟妹を学校に連れて来ても温かい目で迎え入れています。学校に通う習慣が身につくほうが大切だからでしょう。

カティラ村に元気いっぱい女の子がいました。BDP 小学校に通うジュムールちゃん。毎日朝早くから暗くなるまで、私たちの宿舎の前にやってきて最高の笑顔を振りまきます。お父さんはリキシャバン運転手で生活が困難な様子は一目でわかります。5 人娘の次に 1 人息子が生まれちょっとホッとしたそうです。女の子はみんなお嫁にになってしまうのでどうしても息子が欲しかったそうです。上の娘 3 人はよその家へ働きに出され今は 5 人で暮らしています。ジュムールのお姉ちゃんはまだ 2 年生ですがもう少し大きくなれば学校をやめて働きに出されるのでしょう。そしてジュムールちゃんは…。

似たような家族の例を以前、他地区でも見聞きました。5 人兄弟の一番下の女の子は「お兄ちゃんはとても頭がいいのにお父さんからもう学校に行くと言われるの。」と悲しそうな顔で私に訴えました。まだ小学 3 年生というのに学校をやめさせられてしまったのです。リキシャバン運転手のお父さんとも話をしましたが、貧しさゆえにと言われれば私が口を挟むことはできません。

そんな家族は数え切れないほどいるのでしょう。少なくとも BDP 小学校では働きながら通える配慮をしているので、一人でも多くの子どものが、一日でも長く学校に通えるようにと願わずにはられません。

いつの日かまたカティラ村を訪れるときがあれば、ジュムールちゃんが元気に学校に通っている姿を見ることができるようにと祈るばかりです。

インターネットに書かれていたこの言葉に惹かれて、迷うことなく参加を決意し、気がついたらACEFに申し込みのための書類を送っていたようなものすごい勢いで参加することになったスタディツアーだった。

朝は5時起き、帰ると日にちを跨いでいて、休日は休む暇もなく部活動参加。そんな余裕の無い状態で、あなたがやりたいような生徒に希望を与えることが出来るようないい授業を考えたり、生徒たちの心の傷と向き合ったりすることは無理で、それがやりたいのなら公立中学教師なんてやめるべきだ、と大学の教授に言われて、私は教師という仕事を追いかけて続けることに恐怖を覚えた。そもそも私には自信がなく、人よりも不器用な上、精神力もないのだ。教師なんて絶対に務まらないような気がしていた。

そんな迷いの中、スタディツアーに参加した。そして、実際にバングラデシュに行き、農村、スラム、様々な学校の子供たちや教師だけでなく、私たちが泊まった家の近くに住んでいる、貧しくてもパワフルに生きる子供たちや、青年海外協力隊員としてバングラデシュに来て、教師という夢を追い続けているゴウさんたちに出会った。そして、高校生という若さで2週間も親とはなれて異国の地、しかも、何が起こるかわからない危険性の高い国であるバングラデシュにやってきて、頑張っていたチームの皆、国際協力ということについて真剣に考えている意識の高い大学生。自分が怪我をしても、つらい顔一つせずにニコニコして私たちに心配かけまいと最後まで翻訳に奔走してくれたノリピー。とにかく、ここでの出会いは何よりの財産であったように思う。普通に暮らしていたら、確実に会うことは出来ていなかった人たちだった。みんなそれぞれ夢を持っていて、それに向かい、確固とした意志を持っている人たちであった。そして、自信を持って夢について語る人たちばかりであった。

BDPの子供たちは、あんな劣悪な環境にもかかわらず、あくび一つせず熱心に、楽しそうに授業参加していた。農村で、子供たちは明らかに自分たちより裕福な生活をしている私たちを目にしたにも関わらず、遊んで遊んでとせがんできた。

どれほど自分が情けないか、恥ずかしい人間であるか、ということを知ることが出来た。私はいつも、自分に無いものばかり数えて勝手に不幸になって生きてきた。夢に関してもそうだった。生徒の近くに寄り添って、支えていく責任重大な仕事である、一部の会社のOLのように定時で帰って休日は好き勝手に休めるわけがない。これからは、自分にあるもの、素敵なるものを数えて毎日を生きていくことが出来るようになりたい。それはとても難しいことだと思うが、そのことを毎日忘れずに生きていくことが、バングラデシュで出会い、無償の愛を与えてくれた数多くの人々に対する誠意であり、彼らを忘れない、とすることになるのではないか、と思う。

最後に、私のツアー参加に協力してくれた家族、虚弱体質の私をサポートしてくれた参加者の皆、私たちに無償の親切心を持って接してくれた現地の方々に感謝したい。

スタディーツアー中によく聞いた言葉があります。「豊かさの中の貧しさと、貧しさの中の豊かさ」です。初日に、BDPの総まとめ役のアルパートさんから「日本とバングラデシュでは、生活の質が60倍違う。それでは、幸せの質も60倍違うのだろうか。」という問いかけがなされ、私はそのことについて考えながらツアーに参加していました。

当初、日本人の私から見て、不便で衛生環境も悪いバングラデシュを見て、幸せだとは思えませんでした。しかし、バングラデシュでの日々を重ねるにつれて、バングラデシュライフの幸せというものがわかってきました。“手動式”トイレも、毎日の手洗い洗濯も、毎食のカレーも、停電も、行く前には不便に思えて仕方なかったことをすんなりと受け入れていく自分を見て、自分自身不思議に思いました。

東日本大震災の影響で、電気の有限さ、自然の力、人間の限界などが訴えられる中、そのようなことが当たり前のバングラライフは、日本では感じにくい人の生活の原点を物語っているように思えました。私たちは確かに便利な社会に住んでいるけれど、はたしてそれは幸せなことだろうか、と何度も考えました。不便だから不幸というわけではないと実感しました。本当の幸せとはなんだろうかと考えました。人間が、便利になること、効率よく生きることを考えて進化していくうちに、何か大切なものが見えなくなってしまっているのではないかと考えました。また、不便ゆえに生きていることを実感しやすい環境があると感じました。バングラデシュでは、人と人との協力がなければ生きていけません。もちろん日本でも、人は一人では生きていけませんが、そのことが実感できなくなるほど、日本は便利な環境です。バングラデシュでは人間が一人では生きていけないことが実感できます。だから、皆人への接し方をよく知っています。不便な家事をこなす中で、生きているという実感は日本よりも強く得られるのではないのでしょうか。それは、今の日本では埋もれてしまってなかなか見えない、大切なものだと思います。

スタディーツアーで最も印象的だったことのひとつを紹介したいと思います。農村カティラで、毎日一緒に遊んでいた女の子、ジュムール。彼女と私たちはとても仲の良い友人になりました。しかしある時、彼女がどこかで聞いたことのあるような「貧しい家庭」で暮らしていることを知りました。食事は1日2食、6人兄弟中3人はもうすでに働きに出ている、お父さんはリキシャバンの仕事（1日約200タカ＝200円の給料）、家は4畳程度の一間。そのときから、話で聞くいわゆる「貧困」というのは、わたしにとってひとりの友人の事情となりました。日本に帰ってきて、自分の部屋に入ったとき、自分1人の部屋がジュムール一家5人の家よりも広いことに気が付き、涙が零れました。スタディーツアー中に、この世界では5人に対して5つパンがあれば、ある1人が4つのパンを食べ、4人で残りの1つを食べる、という話を伺いました。自分の部屋を見たとき、その言葉が実感されました。自分がジュムール一家のパンを奪っている、と感じました。ここ日本には、モノがあふれている。ジュムールへのプレゼントはいっぱいある、と実感しました。

最後に、BDPのスタッフの方々は、お金も教養もあるような方もたくさんいると思います。その気になれば、いろんなことができるでしょう。しかし、儲かりもしないNGOで働いていらっしやいます。NGOに就職したくても、それで生計はたてられないからやめる、という話を日本でよく聞きます。わたしもそう考える一人でした。しかし、BDPのスタッフさんの様子を見て、国際協力に対する献身的姿勢を伺い、刺激を受けました。自分がいかに自己中心的であったかがわかりました。少ない給料と言っても、もっと厳しい環境の中生き抜く人々を目の当たりにしてきた故、その金額の回り方自体が自己中だと気づきました。私は、地域に密着し、そこで本当に必要なものを提供するBDPの姿をすばらしいと感じました。国際協力の仕事に献身するなら、自分の給料以上に、その土地のニーズを大切にしたいと思いました。

Bangladesh!!

東洋英和女学院高等部 榎森 遥

バングラデシュでの二週間を終えて、冷房の効いた部屋で一人キーボードを叩いていると謎の虚無感に襲われる。私が過ごすこの空間は現実ではあるが、バングラデシュで過ごした空間とはあまりにも乖離していてなんとも言えない気持ちにさせられるのだ。文明の発達とは人類の努力の結果であり、それを当たり前のように感じている。しかしそこでもう一度胸に問うてみたい。文明の発達は「当たり前」であって、幸せに直結しているものなのだろうか。私は、明かりもままならない教室で瞳を輝かせながら勉強していた子供達を思い出すと、幸せとはなんだろうと考えざるを得ない。冷房がなくてもパソコンがなくても、熱意や愛情があればそこは夢を語る場所に変わり、素敵な笑顔が溢れる場所になる。

「あなたの夢はなんですか？」

ある少年にそう聞かれたとき、一瞬答えるのを躊躇ってしまった。自分の夢を大きな声で発表したのなんて初めてだった気がする。夢が大きければ大きい程、叶わなかった時の自分を想像したり、「そんな夢叶わないよ。」と言われるのを恐れてしまっていたのだと思う。しかし、子供達は医者や警察官、先生等と自分達の夢を教えてくれた。特に印象的だったのは「先生になりたい」と言った子供が多かったことだ。周りに意欲的な良い先生がいるから、そういう子が増えているのだと思った。実際、授業をしている先生達の顔も輝いていて、自分自身が楽しんで授業しているのが手にとるように分かったし、信頼関係の上で質の高い教育が成り立ち、子供達の未来の幅が広がっていく様子を感じることが出来た。そして、それを根本的に支えている ACEF や BDP の働きの尊さや凄さを身を持って感じた。

聖書にタラントンのたとえの話がある。私はこの ST でその話の本当の解釈が出来た気がする。自分が貰った才能をチャンスに変えて自分の可能性を広げる使命が人間にはあると思う。バングラデシュの子供達はみんな個性的で、才能に溢れていた。しかし、彼らにはそれらを生かす場が今まで無かったのではないか。その問題を解決する最初の一歩として教育支援が存在する意義があるのだらうと思った。自分もその助けができたなら何よりだと思ったし、その前に自分にもタラントンを与えられているのだから、二倍三倍に増やしていかなければならないのだと気付くことができた。

バングラデシュに行ったことで、国の問題にたくさんぶつかったし、色々考えさせられたこともあったが、何よりも自分自身を見つめなおす大きなきっかけを作ることが出来たと思う。彼らの豊かな人間性に触れれば触れる程、自分の狭小さが浮き彫りになってきて、便利な世界に生き続けることで失ってしまったものもあるのではないかと考えた。私にはあって、バングラデシュには無いものより、私にはなくて、バングラデシュにはあるものの方が貴いような気がした。それでも、私にできる事があるなら、どんなに小さなことでも継続的にやっていきたいと思う。

P. S. いつか絶対にバングラデシュに帰ります:D

バングラデシュでの出会いに感謝

須藤 環

スタディーツアーを無事に終え、日本に到着。成田からの帰路で首都東京の景色にびっくりした。ひしめき合うように建っているたくさんのビル、東京タワーにスカイツリー。改めて日本の建築技術に驚かされた。そして同時にバングラデシュの広く澄んだ青空、空気、親切な現地の方々、きらきらした子供たちの笑顔、スタディーツアーメンバーとすごした14日間が思い出された。

家に着き、祖母に無事に帰ってきたと電話をした。すると祖母は「よかったね。やっぱり日本が一番でしょう？」と言った。確かに私は、日本で幸せに暮らしているし、日本が大好きだけれど「うん。やっぱり日本が一番！」とは答えられなかった。

それはバングラデシュで日本では感じる事の出来ない「幸せ」を多く感じたからだと思う。日本ではクーラーが効いた部屋でいつでも好きなものを明るい電灯の下で食べたり飲んだりすることができる。私たちのために数時間も掛けて作って下さった食事をみんなで分け合って頂いたこと、子供たちと追いかけてこしたり、プラネタリウムのような星空の下で話したり…何時間にも及ぶ停電や水浴びのシャワーが出なくて不便な中でも、バングラデシュでの生活は便利な日本で感じる事が出来ない幸せをたくさん感じる事が出来た。日本での当たり前はバングラデシュでは当たり前ではないのは教育も同じだと思う。日本では自分のキャリアのために勉強しているが、バングラデシュの子供たちは純粋に勉強するのが好きで、楽しそうに授業を受けていた。これからのバングラデシュを支えていく子供たちにはやはり教育が必要であると改めて思った。バングラデシュでは子供100人のうち、大学まで行けるのはたった1人だけという現状がある。今、学校に通って勉強できているという自分の恵まれた環境に感謝し、熱心に勉強していたバングラデシュの子供たちのことを思い出して、一生懸命に勉強して夢を叶えたいと思う。バングラデシュでの生活は14日間と短い期間であったが、自分のこと、これからの生き方についてなどたくさんのことを学ぶことができ、私はバングラデシュが大好きになった。これからも何かの形でバングラデシュに関わっていきたい。そしてまた、バングラデシュに訪れたいと思う。

14日間私を支えて下さったAチーム、ツアーメンバー、BDPスタッフの方々、このツアーに私を送り出してくれた両親、学校の先生方、友達、すべての人に感謝したいと思います。ドンノバット！！

ACEF 43rd Study Tour. バングラデシュでの二週間、本当にあっという間だった。こんなに楽しくて、学びのある、充実した時間を過ごしたことはないです！

このツアーで自分はすごく感じたことがあります。それは始めから最後までずっと感じていたこと、人々の心の温かさです。バングラデシュの人たちはみんなすごーく親切で、優しく、温かい人ばかり。毎日が気持ちよく、楽しく過ごせたのはこのおかげでもあります。本当に幸せな気持ちになりました。「なんでこんなにも豊かな心をもっているのだろうか？」

バングラデシュには壮大で美しい素晴らしい自然があります。ありのままの自然。こんなにも自然を体で感じたのは生まれて初めてでした。しかし、生活をしていて感じるのはやはり不便さ。まあ、自分はすぐ慣れたし、文化の違いも受け入れることもわりと抵抗なくできたが、日本に帰ってきて、比べてみると明らかに違う。向こうに便利なものなんて全然ない。日本は本当に恵まれている。こちらの日々の当たり前は世界中を探してもそうそうないレアなものだろう。どれだけありがたいことなのか、身をもって実感することができました。テレビやネットでこのような話はいくらでも見ることができる。けれど、実際に肌で感じることはできない。この違いの大きさは相当でかいです。

このような環境で生活しているからということもあると思うけど、バングラデシュの人たちは日々助け合いの精神をもって生きているように感じました。そもそも、どこいっても人は一人だけじゃもちろん生きていけないと思う。けれど、バングラデシュの人たちからは人と人との繋がりの大切さを強く感じられた気がします。人間の本来あるべき姿というかなんというか、とにかく大切なことを改めて思い出させてくれました。だから、自分もこれからはもっと今以上に人との繋がりを大切にしていきたいと思いました。そして、自分たちに接してくれたような、あの親切で温かい心を持ちたいです。

始めに話した「豊かな心」をもっているのもしかしたらこのような環境などからきているのではないのでしょうか？自分はそう思います。だから、同時に環境、自然の大切さも感じました。日本はすごい国です。こんなに小さい島国なのに目覚ましく発展し、世界有数の先進国にまでのぼりつめたのですから。しかし、発展することが悪い訳では決してないけれど、発展しすぎたことで失ったものもいっぱいあるんじゃないかと思います。それが今あげていた環境だったりとか。生意気にこんなことも勝手に思っていました。偉そうにすいません。

バングラデシュの人たちの豊かな心、それはまるでバングラデシュの大自然のようでした。本当に美しかったです。

書いてたらキリがないほど、毎日毎日本当にたくさんを見て、感じて、学ぶことができました。このような経験は一生の宝です。二週間で学んだことや感じたことを自分の将来の糧にしていきたいです。そして、必ずまたバングラデシュに帰ります！もう第二の故郷みたいなもんです！

最後に、ツアーを支えていただき、より良いものにしてくれたスタッフのみなさん、そして、唯一の男子として参加してちょっと心配していた自分も一緒にめちゃくちゃ楽しませてくれた最高の仲間たちに本当に感謝でいっぱいです！また、快くツアー参加を許してくれて、送り出してくれた両親には一番感謝したいです。

みなさん！ 本当に本当に… ドンノバットー——！

自分は小学校の頃からバングラデシュに関わる機会がありました。小学校にはえんぴつ集めや隣人愛献金、そして文化祭でのバングラデシュの店など。自分は少しずつバングラデシュという国に興味を持つようになり、小学校5年生の時にバングラデシュの店に参加をさせてもらい、6年生の時も同じく参加をしました。6年生の時バングラデシュの店にバングラデシュからお客さんが来たことがありました。その時に自分は高校になったらスタディーツアーに行くとその人や先生と約束をし、高校になってそれは実現することが出来たのです。

いざ、バングラデシュへ!!

そう思ってバングラデシュに旅立ちました。最初のイメージは世界一の最貧国、環境が悪いなど悪いイメージばかり。そんな悪いイメージを抱えたまま自分にとって初めてのバングラデシュに着きました。着いて飛行機から出た瞬間、蒸し暑い空気。そして空港から出た瞬間の蒸し暑さと照りつける太陽で汗ビショビショ状態。車に乗りプーパイルに向かう途中、窓を開けていると臭い匂い。道路を見ると普通にあるゴミの山。悪いイメージ的中でした。でもその中で人が生活していると思ったときショックを受けました。その日1日中その人たちの生活はどんななんだろう、生きていくのがやっとの人はどうしているんだろなど、ずっと考えていました。

数日をプーパイルで過ごし農村へ。

農村へと向かう時およそ8時間、車とフェリーで向かいました。フェリーの中にはものごいがいて、どうしていいかわからなくなって、動揺しました。農村で学校訪問をしてから日本と比べたのを覚えています。訪問先で色んな出し物をしてくれた子どもたちの目に輝きを感じました。自分も合わせてただけど日本の子どもにとって学習は当然で、大学への進学も当たり前。そんな当たり前の社会は日本とか裕福な国だけで、バングラデシュのような国では当たり前ではないという事実を自分の身を持って改めて知りました。バングラデシュでは経済面や医療の発達などがまだまだで、自分たちには助けられないくらいの問題を抱えていたのです。そんな苦しい状態でも子どもたちや先生やBDPの方々自分たちに笑顔や勇気をくれました。

最後に訪れた2校のダッカのスラムの学校では、本当に辛いものを見ました。1つ目の学校は作りが悪く、雨が降れば雨漏りをしてしまうほどのもの。ハエが教室に何匹も飛んでいて、とても学校とは思えないものでした。2つ目の学校は狭く、何人もの子どもが押し込められていました。

自分には本当に考えられないことばかりで、正直ショックが大きかったです。その夜、自分は考え方が間違っていたことに気がついたのです。自分は裕福な家に育って、当たり前のように私立に通い、当たり前のように大学に行こうと思っていました。でもバングラデシュで見た子どもたちにそれは申し訳ないと思いました。バングラデシュのおかげで本当に自分が目指したい夢やバングラデシュに何をしてあげられるかを考えることが出来ました。いつか自分がもう一度バングラデシュに行って子どもたちの心のケアをして行きたいと思います。本当にいい経験ばかりをすることが出来て、行ってよかったと思っています。

出会いを忘れない

横須賀学院高校宗教主任 天野海走

バングラデシュでのスタディツアーを終え、日本へと帰り、それぞれがそれぞれの日常へ戻りました。湿度の高いジメジメとした雨季のバングラデシュから、真夏の日本へ。3食カレーを食べていた食卓から、和洋中なんでもある日本の食卓へ。手から、箸へ。停電が当たり前の生活から、電灯もクーラーも切れることのない生活へ。井戸から、水道へ。何もかもが元どおりの生活です。

私たちはそれぞれの生活に戻り、ともすればあれだけ鮮烈な経験をしておきながら、その日常の中でバングラデシュでの経験を忘れてしまうことがあるかもしれません。さまざまな経験や出会った人たち、自分が考えてきたことが、日常の中に埋もれて、過去の懐かしい思い出になってしまうことがあるかもしれません。ツアーリーダーを務めてくださった寺島先生は、「バングラデシュの人たちと同じように食事を1日2食にする」と宣言していました。「それくらいのことをしないと忘れてしまう」と。本当にそれくらいのことを続けていなければ忘れてしまうのではないかと思います。

私たちが出会い、経験し、考えてきたことが、私たちの日常とかけ離れたときどき思い出するような過去の思い出として片付けられてしまうなら、それは少しさみしいことだと思います。私たちがそれぞれの日常に戻っても、私たちの出会ったバングラデシュの人たちの生活は同じように続いています。BDPの学校も続き、そこに学ぶ生徒たちが通い続けています。私たちの日常の延長線上に、バングラデシュの人たちの日常を考えることはできないでしょうか。これらの人たちから与えられた力ややさしさに、私たちの日常から応えられるとしたら、どのように応えられるでしょうか。これらの人たちに私たちの日常の中で誠実に生きようとするなら、私たちはどうしたらよいでしょうか。

ツアー中にも話したかもしれませんが、私たちが出会った人たちに対して少しでも誠実に生きられるとするなら、それは私たちが出会い、学び、考え、変えられたことを忘れないで生きるということだと思っています。バングラデシュと出会い、変えられた自分がそれぞれの日常の中に生き続けているなら、その延長線上にいつもバングラデシュの日常を思うことができるのだと思います。そうして、私たちの日常とバングラデシュの人たちの日常が繋がっているなら、このツアーは本当に意義深いものになっていると思います。

今回のツアーは高校生が多い、若く元気のよい、楽しいツアーでした。みんながみずみずしい感性で受けとめたバングラデシュとの出会いをずっと忘れないでいて欲しいと願っています。

バングラデシュの夏は二度目です。昨年は雨が多く涼しい日々で、日本の酷暑を
気の毒がっていたのですが、今年はしっかりと暑さと湿度計がエラー表示になるほ
どの湿気を体感しました。そんな中でも、高校生9名、大学生3名、ツアーリーダー、
チームリーダー、事務局の総勢16名が元気で予定通りの日程を終了できたこと
は恵みとしかいえません。尤も、元気と言っても途中交代で体調を崩すことはあり
ましたが、深刻なことにはならず、回復するとパワー全開で活動していました、若さ
でしょうか。

今回は、ラマダン(イスラムの断食)の期間真っ只中の二週間であったため、私たち
のチームが行った、BDPのジャマルプールオフィスの皆さんは、自分たちは日中
食事をしないで、私たちのために食事を用意してくださいました。又、日が落ちて
断食が終了すると食べる、イフタルのご馳走に招待をしてくださり、減多にできない
経験と同時に「祝福を分かち合うためだから遠慮しないで」との言葉に一同感激を
しました。

中高年は、ともすれば、「今どきの若い人たちは」などと、自分たちとは違う人種
のように思いがちですが、自由時間にハイテンションで楽しんでいる時以外は、それ
ほど違いが無いように思いました。むしろ、私たちの若い頃に比べ、圧倒的に多い
ストレスに晒されている彼らは、より深く考えているように感じました。

車から見る風景や、毎日遊びに来る子どもたちや学校訪問での交流など、見たり
経験した事から学び、自分や自分の周囲についても見つめなおし、感謝の気持ち
や、将来への希望を大胆に語ってくれました。ツアーリーダーの寺島先生が、精神
的な支柱となってくださり、皆聖書の言葉を真摯に自分なりに受け止めることができ
たのだと思いますが、バングラデシュとそこに生活する人々のことを思いながらの
話は、とても心に響くものでした。朝・夕の礼拝でのメッセージや、夜のシェアリ
ングではそれらの言葉を聞くのがとても楽しみで、幸せな時間でした。

まことに、「今どきの若いひとたち」も捨てたものではない、むしろ楽しみな人たちが
あるというのが、今回のツアーでの感想です。なんと素晴らしいことでしょう。

今後もバングラデシュを忘れず、自分に何ができるか考え、関わり続けたいと言っ
てくださったメンバーの皆さん、ご一緒にきて幸せでした。今後、皆さんと長いお
付き合いをさせていただき、この経験をどのように活かしていけるのか、楽しみに
させていただきます。

幸せと豊かさとは

立教大学2年 村 早苗

以前、心理学の論文で裕福さと幸福感は大きく関与していないという日本での研究結果をみた時に、幸せになれると限らないのにどうしてももっと金銭的に豊かになりたいと感じてしまうのだろうかあと考えたことがあった。

バングラに比べて日本は60倍幸せなのか。このアルバートさんの問いに対して、ツアーの初めは子ども達が目を輝かせて勉強する様子から、バングラは貧しくても幸せなのだ、と思い込んでしまっていた。しかしツアーが終わりに近づくにつれ、徐々に私はこの国の人達と断片断片でしか接していないのに、幸せだなんて決めつけることは失礼なのではないかと感じ始めた。私は“日本人”というイレギュラーな存在であるから、バングラで関わってくれた人達の“普段”の生活をみた訳ではない。ただ、学校見学をさせてもらっただけ、一緒に遊んでもらっただけ、家に招待していただいただけ。バングラの人とはとても優しく、微笑んでくれて、ああ幸せそうだと感じてしまうけれども街角の物乞いの人や町ゆくリキシャのおじさんに目を向けたとき、私はバングラの人とは幸せだとは言い切れなかった。だから、私はバングラで“生きて”いる人でないから、バングラの人が幸せかどうかはわからない。最終日にはそういう結論に至った。

日本に住んでみると、与えられることに満足するより与えられないことに不満を持つことが多い。それは、日本ではある程度の衣食住が確立しているから。私達が求めるものは生きる糧ではなく、生活の付属品である“ぜいたく”であるから。日本人は恵まれ過ぎて求めすぎて、不幸せになってしまう。バングラはまだ衣食住に満足でない段階だから、与えられないことが当たり前で貧しいことは今の段階では仕方のないことと、バングラの人達は今の生活に納得しているのかもしれない。たとえば、日本でクーラーなし、シャワーなし、窓ガラスもなしの部屋に通されたら、間違いなく大きな不満を抱くのであろうに、ジャマルプールでは“無いんだから、しょうがない”と思って過ごせた私と同じように。

教育の楽しさを知っている点でキラキラした目で勉強をするバングラの子どもの方が、いつも私が塾で教えている、訳も分からず何時間も勉強させられている小学生たちより幸せであると思う。しかしよくよく考えてみると、子ども達の勉強が楽しい！という裏側には畑仕事や家事以外のことができる、というある種の（悪い意味ではない）現実逃避でもあるとも考えられると思う。

貧困であれば教育環境はうまく整えられない。貧困は未来を担う子ども達を埋もれさせ、国の財産を失うこととなる。しかしそんな子ども達をスラムの赤土から大学へと引っ張り上げるような財力はこの国にはない。だからこそBDPスクールの存在は大きい。儀子さんが言っていたように“この国を知ったからには、支え合わない訳にはいかない”と、強く感じる。

美化したり、思い込んでしまったりすることなくバングラを理解することは、“ボンドウ（友だち）”として支え合っていく上でとても大切なことであろう。私はツアーをしただけであって、この国の人と同水準で生活した訳ではない。だから今出ている結論が本当の結論であるとは思ってはいけなさと感じている。見残したこと、考え残したこと、たくさんあると思う。だから、私はまたバングラデシュに帰りたい。

幸せの価値観

東洋英和女学院高等部 1 年 大内麻代

「バングラデシュ行ってきたんでしょ？どうだった？」

「すごく楽しかったよ。みんないい人で、子供たちはかわいいし、ごはんも美味しいし…」

日本に帰ってきてから、幾度となくこの会話を繰り返した。聞いた人は皆、意外そうな顔でそうなんだとうなづく。でも、そのたびに私は、この言葉だけでは伝えきれない、バングラデシュで見聞きした数々のことを思い出すのだ。

朝早くからプログラムの準備をし、昼は子供たちと遊ぶ私たちを見守り、夜は遅くまで歌合戦をして盛り上がった BDP スタッフのみなさん。私たちの 2 週間の生活は、すべてこの方たちに支えられた。無邪気で好奇心いっぱいの子供たち。真摯な眼差しで学び、物おじせず私たちにベンガル語で話しかけてくる子供たちに、私は癒され、たくさんのことを学んだ。

バングラデシュでは、100 万円で学校を建てることができるという。100 万円は、私一人の約一年分の学費だ。そのお金で、ここでは何百人の子供たちが学ぶことができるのだ。私の受けている学校の授業一時限分のお金はリキシャをこぐ人の 5 日分のお給料なのだ。

アルバートさんがオリエンテーションのときに投げかけた「物質的に 56 倍恵まれている日本人は、56 倍幸せか？」という問い。宿題めんどろだな、新しい CD を買うお金がない、余ったお弁当どうしよう…そんな小さな悩みを持つ私たちは、56 倍贅沢ではあるだろう。好きなだけ勉強して、お腹いっぱいごはんを食べて、欲しいものが簡単に手に入る私たちは確かに恵まれている。しかし、幸せは他人と相対的に決めるものではないと思う。日本と比べてお金のないバングラデシュの子供たちでも、目はとても輝いている。どんな大富豪でも、自分は一人で不幸せだなんて落胆している人がいる。幸せはお金ではなく、その人の価値観で変わってしまうものなのではないか。

聖書のタラントンの話で言えば、私はたくさんのタラントン（賜物）をもらっているのだと思う。でもそれをお金のように土に埋めてしまっていないか？私は、そのタラントンをたくさん増やして、他の人に分けられるようになりたい。今回のスタディーツアーだって、私に与えられた一つの賜物だと思う。バングラデシュで経験したすべてのことを日本の人に伝えるのは難しいのかもしれない。でも、ここで学んだことをいかにたくさんの人に伝えられるかが、今の私の課題だと思う。

ドンノバット、ハシダオ、シュンドール、オシュビダナイ。日本に戻ってきた今でも、ふとベンガル語が口に出そうになる。日本のカレーを食べて、バングラデシュで食べたスパイスの効いたカレーの味を思い出す。鼻歌がエイポッターやドナルドダック。バングラデシュで過ごした時間は短いが、そこで経験したことは私の人生にたくさんの影響を与えた。今なにより願っているのは、大学に進学したらもう一度、バングラデシュに戻ってくることだ。そして、プーバイルやジャマルプールのスタッフの皆さんと再会して、「アパールデカホベ（また会いましょう）」という言葉を実現したい。

「ジャマルプール大好き」

林 由季乃

今日は、プーバイルからジャマルプールに移動しました。移動時間は4時間半くらいで去年の半分くらいの時間だったみたいです。道はかなりすいていたので超スピードを出していたので風が気持ちよかった。私はまだバングラデシュでの交通ルールが分からないので、スピード+クラクション+車間距離になれていないので、すっかり頭が痛くなってしまいました。(あと空気も…) だけど、日本では経験できない体験がいっぱいできたと思いました。

昼は、ジャマルプールでの初めてのごはんで、どんなカレーが出てくるのかドキドキでしたが、とてもおいしくて、食欲がいきに出てしまって、一人でめっちゃ食べちゃいました。(笑) デザートのマンゴーはプーバイルと違う味だった。私的にはこっちのマンゴーのが好きです。

前田さんが言ってたとおり、私たちが昼食を食べてる時から、ずっと外で、子どもたちが待っていて「おいで」ってジェスチャーしたり、手を振ってくれたり、ニコニコしたり…まじかわいすぎ～(笑) その後BDPの学校に通っている子のお家と、ホビーさんのお家に行きました。ジャマルプールの人たちはイスラムの人が多いので、今はラマダンの時期なので、ホビーさんの家で、ラマダン明けの食事を食べさせてもらいました。

ジャマルプールの人々は私たちのことをすごい近くで見えてくるのですごく怖かった。けど、子どもたちは皆、目が輝いていてすごくかわいかった。そこらへんが、日本人と違うなと思った。

今日も良い夢見れますように！！(笑)

8月6日(4日目)Bチーム日誌より

たくさんの感謝

横須賀学院 柴崎里彩

バングラデシュでの2週間は長いようで本当に一瞬でした。そして、この旅の中でたくさんの笑顔に出会いました。大人も子どもも、みんな日本ではあり得ないくらい純粋な笑顔で笑いかけてくれました。あんなに素敵な笑顔に触れたのは、たぶん生まれて初めてかもしれません。その笑顔の温かさや優しさは笑顔の輪の中にいれば伝わってくるし、ただ環境が良いだけが幸せではないということを実感させられました。

私の日本での生活は、時間や勉強、悩み事などに追われる日々でそんな自分があまり好きではありませんでした。しかし、今思うとそんな些細なことに振り回されていたんだなと思います。バングラデシュでは何事からも逃げずに向き合うことの大切さを考えさせられました。

私の感じたバングラデシュの人々は思っていることを心から行動に表しているということです。学校の子も村の子も、みんな一緒に遊んだりするとドンノバットって言ってくれます。それに対して私もドンノバットと言い返すと子ども達は本当に可愛い笑顔で笑いかけてくれます。その時私も心からありがとうと言えた気がして気持ちがよかったです。そんな子ども達を見ていると日本人とは違う思いやりや優しさを持っていると思います。きっと互いに思いやる心はこの環境の中で自然と身に付けながら成長していくのかなと思います。日本はそういう事を発展するとともに何処かに忘れてきてしまった。きっと日本人もそれに気づいたら1人1人が少しずつ変わっていき本当の思いやりの心を持っている人々になることができると思います。

これから先、まだ何が出来るかわからないけれど沢山のことを教えてくれたバングラデシュにいっぱいいっぱいお礼がしたいです。そして、日本のみんなにも大切な事に気づいて貰えるようにたくさんの事を伝えようと思います。

そして、バングラデシュの皆さん本当に沢山の笑顔、温かさ、優しさをありがとうございました。ドンノバットです。そして、一緒にこのスタディーツアーに参加したみんなにも感謝でいっぱいです。本当にありがとうございました。

“Bangladesh” という国

Bチーム 共愛学園高校2年 寺澤小枝子

私にとって、初海外が“Bangladesh”でした。

学校に掲示してあった一枚の紙を見てはじめてこのツアーを知り、そこには浅黒い肌の小さな子どもたちの、見たことのないようなキラキラした笑顔がありました。私は、それに惹かれ参加を決めました。しかし、親戚や友人に物凄く心配されました。やはり、日本の多くの人の“Bangladesh”という国のイメージはよいものではありません。もちろん、自分自身もそうでした。それでも、自分の中の「あのキラキラした笑顔を見てみたい」「もっとこの国を知りたい」という思いの方が強くなっているのに、気が付きました。

この国で二週間過ごし感じたことは、なにより人々の優しさと子どもたちの純粋さでした。特に、BDPのスタッフの方々には大変お世話になりました。一人一人の気遣いや親切が、異国に来て不安になる私の心をホッとさせてくれました。この国の人たちは陽気で素敵です。そして、近所や学校の子どもの輝く瞳から感じるものがたくさんありました。遊ぶことも歌うことも、勉強することも楽しそうで一生懸命でした。その姿を見て、「とてもよい環境にいる自分は何をしているのだろう」と感じました。毎日たくさん授業を受けることができるのに、それを当たり前と考え面倒だと思ってしまうことだってありました。その過去の自分を恥ずかしく思い、ずるいとも思います。今の私にできることは、何事にも全力で取り組むこと。そして、この国の素晴らしいところを私なりの言葉で、日本のたくさんの人たちに伝えることです。

これからこの国を担う子どもたちがこんなにも輝く瞳をもっているということは、この国の未来は輝いているのだと思います。すべての子どもたちが、学校に通い学ぶことができたならどんなにいいことか、、、私は願い、ずっと協力していきたいです。そして、たくさんのことを気付かせてくれた

“Bangladesh”に感謝したいです。「ドンノバット！」

この国で過ごした一日一日は、私にとって忘れることのない大切な思い出になりました。そして、人生を変える大きな経験となりました。導いてくださった神様と、背中を押してくれた両親、お世話になったACEFスタッフのみなさん、先生方、BDPスタッフのみなさん、ツアーの仲間たち、関わってくださったすべての人に感謝します。ありがとうございました。

絶対、また行きます！

☆バングラデシュとの出会い☆

樋口 茜音

私は幼い頃マザーテレサの伝記を読み、いつか自分も『世界で困っている人を助けたい』と思い続けていた。しかし、自分に何ができるのか、どのような手段で助けることができるか分からないで悶々とした生活を送っていた。自分のこれから進むべき道がわからずもがいていた。進路を明確にするためにも、視野を広げたいと思っていた。そんなときにバングラデシュでの『スタディ・ツアー』があることを知り、未熟な私が少しでも成長することができる絶好の機会かもしれないと思い、参加することにした。

バングラデシュでの『スタディ・ツアー』のチラシを見るまで、バングラデシュが一体どこにあるのか、何語を話すのかもわからなかった。唯一の知識は『世界一貧しい国』と言われていることだけだった。バングラデシュについて調べていくうちに、多くの子供たちが貧しいがゆえに教育を受ける機会を持つことができずにいることを知り、子供たちが一体どんな風に生活をしているのか想像すらできなかった。

お金がなくて公立の小学校に通うことができない子供たちのために、バングラデシュの人たちが提供した土地に、日本からの支援金を基に建設し運営されている寺子屋学校を何校か訪問した。教室には電気がなかったり、台風などの自然災害によって屋根がなくなっていたり、壁が壊れていたり、さらには教室が足りないために外で授業をしているところもあった。決して良い環境とはいえないなかでの授業ではあったが、子供たちの目は真剣そのものだった。私が「勉強は好き？」と聞くと笑顔で「大好き！」と答えてくれる子が何人もいた。勉強するために、川を泳いで学校に通っている子もいた。しかし、日本のように教育制度が整っていないために、高校や大学に通うことができるのは、本当にわずかな子だけなのだ。多くの子供たちは、勉強をしたくても家のために働かなくてはならないのだ。私は街で実際に大人と同じように働いている子供たちを何人も見た。細い足で人力車をこいでいた子供、服や食べ物を売っていた子供、そして物乞いをしていた子供。

『もっと、もっと支援が必要だ！』と実感した瞬間だった。

バングラデシュを訪問し一番心を奪われたのは、農村で出会った『子供たちの偽りのない笑顔』である。私たちが宿泊していた施設に朝早くから多くの子供たちが遊びに来て、子供たち自身で水たまりを見つけてはしゃいだり、木登りをしたりと日本のようなおもちゃがなくてもとても楽しそうだった。

バングラデシュでの2週間は、感謝の気持ちで胸一杯だった。とくに現地スタッフの方々にはドンノバット（ありがとう）を何回言っても言い足りないぐらいだ。断食中にもかかわらず、私たちのためにおいしい食事を用意してくれ、シーツを洗ってくれ蚊帳のセットをしてくれて・・・細かいことにまで気配りをしてくれる姿に胸を打たれる日々だった。現地の子供たちの目がキラキラ輝いていたのはそんな暖かい大人たちのもとで育ったからでもあるのかなと思った。

本当の豊かさとは何か、考えさせられるスタディ・ツアーだった。

スング〜♡

編集後記 (:) ね

編集委員の皆、のりーちゃん、
ありがとうございました♡

ようやく完成しました！やったー！(´▽`)♡♡
らT中から、もう一度バングらいいって 神

決めてましたが、この編集をしながら、
その思いがさらに高まってゆきました。笑
読んでくださったおにも「バングらって
シンボル(素敵)！いいきたい！」と
思ってもらえて嬉しいです。Aチム



☆バングラデビュー 楽しかったなー！！ういゃ

写真を見返しながら、たくさんの
思い出がよみがえってきました。

スクールの子ども達は元気かな
またバングらに行きたいな♡
原稿手交してくれてありがとう♡

友 省 B74 汗 村 茂

キリッ

2012.9.22



Bangladesh に寺子屋を贈ろう

教育はすべての協力の基金です。会員としてご協力ください。

個人会員	年額 1 口	5,000 円
団体会員	年額 1 口	50,000 円
学生会員	年額 1 口	2,000 円
一時寄付	随時	金額自由



アジアキリスト教教育基金

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18-26

TEL. & FAX. 03-3208-1925

E-mail: acef@acef.or.jp

<http://www.acef.or.jp>